

第17回銀華文学賞発表

銀華文学賞

最優秀賞

第一七回銀華文学賞は、日本全国及び海外から、一九四篇の御応募をいただきました。まことにありがとうございました。外国を舞台にしたもの、また歴史や中国古典を素材にしたものなど、多彩で豊かな作品が集まりました。レベル的にも高い水準の作品が増え、選考委員一同どれをふるい落とすかに苦しむほどでした。例年より入賞、入選の数が増える結果となったことはたいへん喜ばしいことです。予選選考を経た作品の中から、大高雅博・八覚正大・小浜清志・五十嵐勉の選考委員による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

作品は、誌面の都合により、今号は最優秀賞と優秀賞のみを掲載させていただきます。奨励賞などは次号以降にスペースその他の事情に合わせてつづつ掲載の予定です。

授賞式・祝賀会につきましては、他の賞との兼ね合いを見ながら考慮中です。

なお銀華文学賞は明年も同じ要領で年齢四十歳以上（応募時）とさせていたいただき、枚数、締切、審査料など他はすべて同じとして募集させていただきます。どうぞまた奮って御応募ください。心からお待ちしております。

「緋の滴」

世波貴子よなみ

（佐賀県佐賀市）



優秀賞

「三蔵法師の鍋」

田名トモ（島根県出雲市）

「琉球の種痘」

成瀬健太郎

（神奈川県藤沢市）

「震災下の脳手術」

石垣麗子（宮城県亶理郡）

「梯子の上のチベット」

遊座理恵（東京都西東京市）

「線」

北島雅弘（愛知県春日井市）

「クリスマス御馳走」

鈴木和子（神奈川県厚木市）

奨励賞

「捨てる神あれば拾う神あり」安芸木兎（東京都墨田区）

「モンマルトルの空に」麻井さほ（神奈川県相模原市）

「振り返らない旅人」田村正勝（神奈川県横浜市）

「魚影」室町 眞（東京都町田市）

「月光」藤倉 涼（静岡県三島市）

「昭和の恋」長野正毅（東京都杉並区）

「ひずんだ道」木下衣代（大阪府大阪市）

「元氣？」鐸木英莉（福岡県福岡市）

「揺らぐ窓」梶川洋一郎（広島県広島市）

「寡黙亭の面目」高橋惟文（山形県山形市）

「看取り引受人」谷道俊明（富山県富山市）

「毛虫のレラ」青木ガリアン（北海道札幌市）

「裸足のリナ」田中信子（大阪府大阪市）

童話特別賞

「じはんき コンチェルト」いまだまりこ（広島県呉市）

佳作

- 「揺れる木」 水沢 郁
- 「祝舞い」 古岡孝信
- 「マリア様の人形」 平山嗣人
- 「女主人」 太田 悠
- 「クルトの物語〜東独の夢と郷愁」 矢口栞子
- 「愛・毘 序章」 古池麻矢
- 「蜘蛛の糸」 吉岡幸一
- 「日々過ぎる」 平井文子
- 「狐狼の拳」 塩崎憲治
- 「透明な森」 蓮見 仁
- 「肝煎平吉の覚悟」 竹浪和夫
- 「プラタナスの抱擁」 寺木 仁
- 「幕末二人のアウトロー」 米山哲雄
- 「君影村の娘」 泉水雄矢
- 「三木合戦・淡河城の戦い」 宮本義則
- 「指」 奥村郁雄
- 「柿」 とくろかずまさ
- 「柩の中」 河田充恵
- 「遠い極楽浄土」 中田重顕
- 「空へ、空から」 有森信二
- 「落日のハマム」 菊野 啓
- 「邂逅」 飛葉哲朗
- 「土族の憂国」 笠置英昭
- 「踊るピエロの小劇場」 山崎こうせい
- 「猫の代筆」 金城カナ
- 「キツネ」 雲坂稜線
- 「下曽我物語―小説・尾崎一雄と太宰治」 嶋津治夫
- 「臺灣奇譚」 里中一公
- 「食い逃げ」 風樹 茂
- 「真土騒動」 秋野成道
- 「セネガルの風に抱かれて」 葉月 舞
- 「アレキサンドリアにないものは」 有汐明生
- 「淡雪」 折口 真
- 「リターンライダー」 宮 幸作
- 「塩サバ弁当」 山田 明
- 「涙がキラリ」 佐藤 勉
- 「ざざれ石」 思水 申
- 「放哉を編む」 足立悦郎
- 「花の名前」 わかさきまさこのぶ
- 「奈落は巡る」 山本嘉彦
- 「靴を愛でる男」 坂元淳子
- 「絶唱の行方」 依田 泰
- 「ハシビロコウのキス」 白川計子
- 「ともだち」 待木 啓
- 「宙にさまよう」 桐原唯香
- 「沈丁花の穴」 虹乃ノラン
- 「夢は現か幻か」 崔宣葉
- 「青き日」 邑崎龍哉
- 「スパイクシューズ」 石川正美

選評

ほとんどが優秀賞、奨励賞クラス

大高雅博



今回は、最終選考に残った作品を読んで酷く驚いた。ほとんどが、優秀賞、奨励賞クラスの作品ばかりだからだ。これは銀華文学賞を長年続けたことと、「まほろば賞」を主催したことが大きいかもしれない。色々な経歴の方の応募もあるようだ。

そのため、当選作などは採めるのではないかと思えたが、世波貴子さんの「緋の滴」がすんなり当選作となった。選者が全て高得点を投じていたからである。時代は明治だが、広く言えば、時代物になり、時代物での当選作は初めてとなる。画期的なことかもしれない。江戸時代、罪人の首打ち役、死罪の罪人の胴を使つての刀の試し切りを世襲としてきた家系の男が主人公である。剣術の腕もあり、安定した生活だったが、明治になり、首打ちが禁止と決まり、時

代についていけない男がいる。首打ちの時に、見学に来ていた絵師がいて、彼から、女の肖像を見せられる。それが、毒婦お伝であり、彼女が、最後の首打ちとなる。流れが良い。小説の題材としては、申し分がない。それに、彼の家族のこと「人胆丸」のことなど、細部も良い。この作品を女性が描いているというのも不思議だが、優れた作品だと思ふ。

今回、僕が一番衝撃を受けたのは、優秀作北島雅弘氏の「線」である。食べることをやめてしまった男が、ついに一本の線になってしまふ。「線男」の誕生である。今までにこんな発想はあつただろうかと、考えてみて、思い浮かんだのは、安部公房の「魔法のチョーク」なのだが、やはり違うので、北島さんのオリジナルだと思ふ。凄いのはこの「線男」をたとえば、アニメや実写でやるときにかなり表現が、難しいのではないかということだ。つまり、小説だからこそ作れるものを見出したということになる。これは蛇足だが、ある作家の小説が映画化され、小説の世界が完全に表現された時、それが成功と言えるのだろうかと考えるときがある。それでは小説を書く意味がなくなるのではないだろうか、小説でしか表せないものがあるはずだし、それが他のジャンルで簡単に表現されるとすると、それは小説家の敗北かもしれない。極論だが、小説には、独自性があるはずだという話だ。そういうことを考えるほど、この作品にはインパクトがあつた。「線男」は外に出て、結局、

公園のベンチに座り、まわりの時間が過ぎて遠くの未来までいくのだが、今回はそれでいいとするものの、「線男」には、色々な発展性が考えられる。たとえば、ベンチに座っていると、別の「線男」や「線女」がやってくる。彼らの間で何が起こるのだろうか。または、どこかに「線男」や「線女」の住む町があるのかもしれない。他にも考えられるだろう。異例だが「線男」の第二弾を期待する。今のところ、北島さんしか書ける人はいないわけだから。

優秀作田名トモ氏の「三蔵法師の鍋」も驚かされた作品である。今までも、遣唐使ものは何作かあったと思うが、この作品が、最も優れている。三蔵法師やライバルの慧満禪師や、近くの高僧もよく書き分けられている。題名にもなっている三蔵法師の鍋についてもまったく知らなかったが、色々丹念に調べられていて、それがこの小説の成功に繋がっているようだ。優れていると思う。

優秀作遊座理恵氏の「梯子の上のチベット」は、亡くなった妻のラインに男からのものが残っていて、当初はまたいつもの不倫ものかなとうんざりした気持ちがあったのだが、見事に裏切られた作品だった。不倫ではなく、ヒマラヤ登山の話になり、梯子の上のチベットという題名のような壮大な話になる。こういう裏切られ方は良い。

奨励賞鐸木英利氏の「元氣？」は、遠く離れた親友が、LINEを使って、やり取りをしているが、LINEの内容と、て以来の本格SFである。なかなかよく考えられていて僕は面白かった。ただ、ここでは、認められにくいかもしれない。前作とも関連があるかもしれないので、最後の敵をもっと明確化して、それも含めてもよかったかもしれない。あるいはもっと長いものにして、別のSF色の強いところに応募を考えられたらどうだろうか？

佳作飛葉哲郎氏の「邂逅」だが、先の未来が、恣意的ではなく、たまたま見えてしまう男の話で、SFでいう、広い意味での時間ものにあたるのだろうか。現実にはモノクロで、未来はカラー、カラーは選択の余地のある未来として描かれる。男は、突然襲う胸の発作があり、原因が分からず、人生に暗い影を落としていたのだが、その病気がはつきり分かるのはとても良い。ただ、友人が同じような症状があることで入院するわけだけれど、こころは、未来が見えることで、入院する展開の方が良かったのではないかな？ また選考会でも問題になった点であるが、時間について、色々語られるところがあり、道元の話はいいとしても、アインシュタインとか、ダライラマの輪廻転生とかは、陳腐すぎるので、書かない方がよかっただろう。別にこの小説では科学的なものはいらないと思う。あるいはもっと深い洞察が必要であったかもしれない。時間についての小説的な解釈があればよかった。この作品は惜しいと思う。傑作になる可能性があった。書き直してみますか？

現実が少しずつ乖離していくところが面白い。新しい試みだと思ふ。

奨励賞安芸木兎氏の「捨てる神あれば拾う神あり」は、明治時代の料理人の話だが、明治時代の平均寿命が四〇代ということも含め、時代がよく描かれている。良い人情話になっている。

奨励賞青木ガリアン氏「毛虫のレラ」は青木さんらしいいい話である。ここには、アイヌ系、中国系、韓国系の子供たちが登場し、共生する必要性を説いているように思う。これから、もっと、それが必要になるだろう。最近、アイヌはいないという主張する人々がいることを知った。どうしてそんなことを言い出しているのかわからないが、歴史や学問を全く無視するようなことを本気で言い出す人がいるとすれば、薄気味悪い話だ。

佳作の邑崎龍哉氏の「青き日」は、中国の西、ウイグルにある砂漠地帯にあるらしい丹沙での発掘を描いているのだが、そのマイナー性に興味を持った。ひよっとしたら、作者の実体験が、反映されているのではないかと思った。小説としては、丹沙に絞って描いた方が良かったかもしれない。暑さ、喉の渇き、砂の感触など、もっとそういうものが読者に伝わってくるような、血の通った物語ができたかもしれない。

佳作の菊野啓氏の「落日のハمام」は、銀華文学賞が始まっ

本年は、銀華文学賞としては、満足できる年となったと思ふ。これが続いてくれることを願うばかりである。

層が厚く読み応え

小浜清志



今年層が厚く読み応えのある作品が多かった。当選作になった「緋の滴」はほぼ満票に近い点数で他を寄せ付けなかった。明治の初めの死刑執行がまだ斬首であった時代を描いて見事な出来映えであった。

他に気になった作品をあげる。

「梯子の上のチベット」死んだ妻の携帯電話が鳴り、連絡漏れの誰かがラインをしてきたのかと思ひ携帯を開いたことで、妻の浮気を知る羽目になる。友人に相談してもそんなことはないかと否定されるが疑問は膨らむばかりであった。それから、ヒマラヤに行くことになり壮大な景色と優雅な生き方をしている人と出会ったりして宇宙を見た気がした。帰国してすぐに妻の浮気相手と会うつもりで出かけたが家はなくなっていた。隣の人に話を聞いてすべてが思い違いであることに気づく。いい作品であるが、ヒマラヤ

を持ち出したことで逆に小粒になってしまった。

「震災下の脳手術」東日本大震災が勃発した日に夫が脳腫瘍の手術をする予定であったが、手術どころではないことが次々と起こる。非常事態。家族の安全を確かめるために車を出して走らせる。すべての明かりが消えヘッドライトだけを頼りに進む描写など体験した人でなくては書けない部分がいくつも出てくるが、小説という枠で考えるなら事実を積みかさねるだけではない深い掘り下げも必要だったであろう。

「クリスマススの御馳走」夫が前立腺癌と診断され子や孫たちも交えた闘病記である。文章の乱れもなく夫が病に犯されていく過程が克明に描かれていて、実際にあったことだろうと推察した。死んだ夫を忍ぶように優しい筆づかいで書かれていて読後感もよかったが、あまりにも美しく思いうれしさを残そうとしているところが少し残念だった。夫は死に向かっているわけだからもつと暗部があるはず。

「寡黙亭の面目」の作者は過去に当選作をかいたこともある実力者であるが、今回は小手先でさらりと仕上げたという出来映えになっていても残念であった。もう少し吟味してつぎの作品に取り組んで頂きたい。

「ひずんだ道」自己免疫疾患がどのような病気なのかかわからないが、一日二時間の歩行、青汁と塩水を決められた量を毎日続けることが治療であるという。固形物はいっさい

体内に入れないが、息子や夫のために料理は丹念につくる。食えない食事を作る妻を夫は気づかってくれる。素材としては良い作品なのだが展開の仕方が曖昧すぎて素材を活かしきれなかった。

「靴を愛でる男」婦人靴売り場は自分にとって癒しを得られる空間だ——という男の物語は最初は軽快であったが、後半に破綻してしまう。靴が足首を締め付けるという発想はあまりにも安易である。

「孤狼の拳」この作者もかなりの筆力をもっているが、今回は筆力だけに頼った作品になってしまい惜しいことである。

創作パワー全開

五十嵐勉



第一七回の銀華文学賞は、昨年よりさらにレベルが上がリ、いつもの確かな充実感を覚えた。一昨年の第一五回で二〇九篇の応募があったとき、選評で「層も一段と厚くなり、読み応えがあった」と記している。また昨年の第一六回で「最終候補に残ったのは、読み応えのあるも

入選

- 「沙耶と黒猫」 土屋 慶
- 「異界の人」 谷口俊明
- 「尼僧峰隣」 行久 彬
- 「萌羽のいた径」 小山内達雄
- 「紫炎の如く」 祐紀 生
- 「草に抗う」 富井ひとみ
- 「六人の縄綱い」 齊藤宏壽
- 「プールサイド」 牧 康子
- 「実録・いまどきのがん治療事情」吉澤 久
- 「母は三度夜汽車に乗って」今井清賀
- 「虚空行路」 沢田進二+
- 「座鏡」 シユウ・アマノ
- 「初潮」 吉田繁夫
- 「心」 友 修二
- 「銀杏紅葉」 小倉孝夫
- 「素数ゼミ」 貴峰 彬
- 「恥」 後藤克之
- 「ビバーク」 片岡 真
- 「開かずの間」 鹿石八千代
- 「鍵」 宮脇すみれ
- 「濃霧」 東間征子

銀華文学賞選考委員プロフィール

大高雅博 おおたか まさひろ
1954 石川県生まれ 日大文学科卒
80「旅する前に」で群像新人長編小説賞受賞
他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥ・リメンバー」など

小浜清志 こはま きよし
1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87 作家中上健次に師事、マネージャーを務める
88「風の河」で文学界新人賞を受賞

八覚正大 はっかく まさひろ
1952 東京生まれ
早大理工学部数学科・都立大仏文科卒
91「十二階」で新潮新人賞受賞 文藝学校・NHK 学園講師 主著『「シェルター」発』（けやき出版）『夜光の時計』（新読書社）詩集『朝一の獲物』『学校のオゾン』（共に洪水企画）

五十嵐勉 いがらし つとむ
1949 山梨県生まれ 早大文芸科卒
79「流謫の島」で群像新人長編小説賞受賞
84-90 タイ在住、カンボジア問題取材「東南アジア通信」「ASIA WAVE」編集長
主著『緑の手紙』（インターネット文芸新人賞）・『鉄の光』『ノンチャン、NONGCHAN / 聖丘寺院へ』『破壊者たち』

作家集団「塊」新メンバー募集中

連絡 090-8171-9771

※今回も力のある作品が多かったため、入選として賞揚させていただきます。

のばかりだった。年々全体のレベルが上がっていることを感じた」とある。しかし今年はさらにいっそう多くの優秀な作品が集まり、充実感が増した。他の賞にも応募しているような強者が集まってきた観がある。最終選考の5点評価で優秀賞に値する4点以上は昨年一七篇あったが、今年は一六篇でほぼ同数、奨励賞に値する3点以上の作品一二篇を合わせるると二七篇で、最終候補四〇篇のうちの三分の二を占めることになる。実際は他の選考委員との協議で細かい落とされざるを得ないのだが、これだけのいい作品が集まるということに、四〇歳以上の潜在的な創作パワーを再認識せずにはいられなかった。初めて応募する筆者も多く、新顔が半数以上を占めている。

逆に昨年、一昨年において、当選したり、優秀賞になったりした作者のものも、新しいパワーの作品に押されて、後退する現象も起きている。少し力を抜いたり、甘い筆になったりすると、トップグループから脱落することも、やむを得ない現象として受け入れざるを得なかった。短期間に優れた作品をそう多く書けるわけはなく、コンスタントに執筆生産することは難しいことにはちがいないが、厳しい現実を練磨の砥石として、精進してもらいたい。

今回のもう一つの傾向としては、歴史や古典に依拠した作品が多く、上位にもそれが反映されたことにある。

私が5点満点を付けた最優秀賞作品、世波貴子氏の「緋」に焦点を結ばせている。バランスよく古代の唐留学生の世界を再現している。石垣麗子氏の「震災下の脳手術」は、まさに手術をしようとしていたとき東北大地震に襲われた三・一一の一面を克明に記録している。緊急状態下の手術事情が、いっそう緊迫感を高め、震災の被害を鮮やかに浮かび上がらせる。震災の小説はかなりあり、それぞれにリアリティを持ったものとして読んできたが、この作品の切迫感ほど切実な危機感を持つては迫ってこなかった。貴重な生きた記録として残す代表的作品になる。技巧を使わない、質朴な文章が、現実をそのまま伝えていて、迫真力を投じてくる。

同じく優秀賞の遊座理恵氏の「梯子の上のチベット」は、亡くなった妻の浮気への疑いが、スマホから相手の住居を訪ね、障碍者の部屋に繋がる梯子からチベットの空間にまで及んで、愛情の宇宙的結像に至る、壮大な世界観に迫ろうとした意欲作である。そのスケールの大きさは比類のないものだが、妻の身体障碍者への献身が、一気にチベットの宇宙世界まで広がり、実際にそこへ赴くのは、世界が広がり過ぎて無理がある。チベットに行かないで、その壮大

の滴」は、明治の最後の断首執行という特殊な題材を選んでいる。歴史小説、時代小説としても分類できそうだが、よく調べた歴史事実の上に、首を切り落とす衝撃的な場を、真に迫る力を漲らせて再現しているところに、強いインパクトを生み出している。女性はこういう題材は避けがちなのではないかと私の偏見を見事に覆して、生々しく蘇らせている。高橋お伝への人間としての掘削がもう少し深くてもよかったかとは思ったが、斬首死刑の最後という歴史の変遷の陰に、それほど違和感なく最後を結んでいる。歯切れのよい明確な文体も、この内容に合っている。切れ味鋭く、しかも鈍重な読後感を残していた。

優秀賞の成瀬健太郎氏の「琉球の種痘」は、沖繩から初めて天然痘の脅威を取り除いた種痘導入の経緯を生き生きと描いて、歴史叙述の確かさを備えた好短篇になっている。沖繩の風土にしっかり根ざし、しかも幕末からの西洋の進出とその医療文化の伝播を踏まえて、本土内地とは切り離された形での種痘の導入には、鮮やかな人間ドラマが展開されている。当時本土よりも先にヨーロッパの文化が伝わり、その情報を摂取している一面も新鮮に映った。沖繩でなければ書けない題材をしっかりと形にしていた。

田中トモ氏の「三蔵法師の鍋」も歴史小説である。唐への留学僧「道昭」を軸に、当時の唐の仏教事情が活写されている。よく調べてあり留学生事情や長安の都の様子が生れる着想ではある。今回最も注目された作品は北島雅弘氏の「線」である。これは「生きてることが苦しくて」食べられなくなり、やせ細って「線」になった男の物語で、この男から見た世界の現実が逆説的にクリアに浮かび上がってくる。ここまですべて極端に変身させた着想は、奇抜を超えて画期的であり、今後何か大きく展開できそうな可能性を孕んでいる。予選では最高点が付けられていた。惜しむらくは、イジメとか孤独とか、線の消極的な領域で留まっていることである。この筆者が「線」のむしろ積極的な領域に気が付き、それを大胆に世界の矛盾面に突き付け、活躍させていったら、痛快な展開が期待できるだろう。「線」には太さも面積もない負の属性があると同時に、領域を「分ける」とか、「区別する」とか積極的な属性もある。これを現代の国境問題や紛争などの舞台で活躍させたら、ひじょうにおもしろい働きが期待できるし、重要な提起も可能だろう。パレスチナの問題も「線」の活躍する舞台になりうる。筆者の着想の拡大に期待したい。

鈴木和子氏の「クリスマスの御馳走」は、よくある癌の闘病記と言ってしまうばそれまでだが、ひどく素直に緻密

に明るく書いてある点が、希望に繋がる虹の橋のような趣を醸している。癌患者の最期を看取る眼差しに深い愛情と温もりがあり、ストレートに命を抱擁し、見送る姿勢に、未来がある。こうありたいという一つの理想的送りが結像していると思った。

奨励賞にもいい作品が目白押しで、「捨てる神あれば拾う神あり」(安芸木鬼)は、ありきたりなタイトルが不満だったが、失職した老後の父親と料亭の女将のひよんな助け合いが温かく描かれていて、救われる。「モンマルトルの空に」(麻井さほ)は、フランスの友人の同性愛の心情が色濃くリアリティをもって描かれていて、一つの深い世界の存在を訴えている。同性とか異性とかを超えた愛情の純粹な可能性が示されていた。「月光」(藤倉涼)は、孤高のジャズピアニストとその酒場の愛人の人物像が際立っていて、芸に身を捧げるような生き方に独特の香りがある。鍵盤に両手を乗せたまま死ぬラストシーンは芸術家の理想の死に方で、一つのパターンを追っている典型化は免れないものの、そこに顕現させた手腕は、確かな芸を感じさせた。優秀賞でもおかしくなかった。

高度経済成長長期の企業の海外進出を舞台にした「振り返らない旅人」(田村正勝)は、取引先相手のマレーシア人の友人との友情を自然に素直に書いていて、外国人と交わる可能性とその真の絆をしっかりと書きあげている。重要で

ける若い娘とが重なってそれが生き生きと動き始めるストーリーが空想と現実の境を曖昧に溶かして、新しい世界を喚起してくる。過去とないまぜになって伸びていく心理の蔓が、老いの新たな生命を匂わせるところに不思議な味わいがある。

「寡黙亭の面目」(高橋惟文)は、居心地がいい料亭でありながら喋らない主人の過去の秘密に触れていくストーリーが軸になっている。彼の思いやりのある行為に触れ、それが明らかにしつつ、店主の心の屈折を溶かしていく結末に、和やかな未来が漂う。高橋惟文氏ならではの温もりが包んでくる好短編になっていた。

総じて、熟年パワールの全開した第一七回銀華文学賞だった。新たな筆者群が加わって、いっそうパワーを増している。新人賞顔負けの、まったく新たな着想も光った。潜在的な力はもつとありそうである。次回も大いに期待したい。



あるにもかかわらず、こうした外国人との人間としての交わりを書いた作品は意外に少なく、その点でも特に評価した。外国人を人間として受け止め、描くことは、されているようできわめて稀有で、この作品に残る「エディラ」は日本人の胸に深く残る人間像を刻んでいる。タイトルは一考してもらいたい。

「魚影」(室町真)は、観光業界の盛衰を的確に捉えていて、時代の移り変わりと、そこで浮沈する人間像を見事に表していた。八〇年代、九〇年代は航空業界の席の確保に旅行社が大きな力を持っていたが、コンピュータの普及によって、直接航空会社が予約を受け付けるようになり旅行社が破綻していく過程、そしてまたその変化にうまく適応して、時代を先取りして乗り越えたように見えた者も、コロナ禍という情勢のために結局やはり沈んでいく状況が、この業界に関係した者でなければ見えない洞察の上記的確に描かれている。観光業に集まる客層が「魚群」「魚影」として象徴されているのは必ずしも適切ではないかもしれないが、一つの世界と時代をよく切り取ったものとして、私は評価した。こういう時代表現はなかなか出てこないものだが、やはりだれかが書いておくべきだろう。筆者の果敢に挑んだ姿勢は、確かに時代を抉っていた。

定年退職した教職者の心の揺らぎを描いた「揺らぐ窓」(梶川洋一郎)は、死んだ娘とバス通勤のなかでよく見か

様々な小説の豊かさ

八寛正大



夏の猛暑酷暑激暑炎暑、それが十月に入るまで続き、それから急に気温が落ち、また好天が続く……そして急に晩秋に……昨年と似たような軌跡をたどりつつ、でも今年の方がさらに暑さが続いたような——という昨年の選評の出だしを読み返し驚いた。ということは、え、こんなに暑くてへばったのは人生初めてと思つたら、昨年とも一昨年もそうだったとは！

プーチン・ロシアの侵略戦争も延々と続き、おまけにイスラエルとパレスチナがガザ地区で悲惨な戦火を繰り返す。アメリカ大統領選は、予想はされていたにもかかわらず、有罪を宣告されていた者が返り咲いてしまった。良い悪いではなく、その事実が現前にある。遠いギリシアの都市国家での直接民主制はさておき、膨大な人口を擁する近代国家は、間接の民主主義選挙に頼るしかない。一票の重さが選挙区で異なるとよく取沙汰されるが、我々の持つ一票は、実は形式的平等に過ぎず、人格的重さの違う一票なのだ

……が、それを個別に計る計量器などはない！

逆に日本のことを我々は癒着だ、遅れている……と揶揄しながら、それでもどうにか、今回の選挙では大きく政治が金権を抜け出せそうな方向——への期待を持たせてはくれる（ただ日本人の多くは権力との直接の闘いは避け、事態が変化してから後付けで批判する「共同体的事なかれ」の気もするが……）。

おっと、文学で政治と宗教の是非を語ることは避けるべきだった。むしろどんな政治になってもまた宗教も、人の脳内をコントロールしてはならないのだ。そして思考思索こそ、人間の主体的自由を行使できる唯一のものなのだ。

こうして文学に志す人々こそ、人間の尊厳を守ることに気づき、大切な価値ある時間を生きている同志——だと思っ……そんな作者たちに敬意を払いつつ、今回も読ませていただいた。

「緋の滴」「南無阿弥陀仏——」唱え終わった時、首は落ちていた。筵の上に転がって、なお微かに唇が動いた。漆喰に群れ咲く曼殊沙華の花を描いて、鮮やかな血飛沫が広がる。切っ先が弾いた砂が、その上にぼとりと落ちた。（仕損じた——）吉亮は目を閉じた。無心に振り下ろしたはずの剣に、動揺があった。この出だしのインパクトは中々のものがあつた。山田吉亮、二十代後半の主人公、彼は徳川の世が続いていれば、代々続く武家の誉を背負い続けて

しくもこれが己の務めであるとして、伝を斬首し……ラストで絵師から貰った伝の画をみて、「懐かしい女に会うような心持ちになった……」と昇華された心象が描かれている。しかしこの主人公が、どうしてそんな達観した気持ちになれたのか……役職、正義感だけでそこまで悟れるのか、少し謎ではある。曼殊沙華で浄化させてしまったかのような……。

「琉球の種痘」一言で言えば、琉球の医者、天然痘が流行った時、在住していたイギリスの医師に会いに行き、牛痘法の種痘を知り、苦勞して効果を確かめ、人々を救った話だ。しかし、描写がよく実に読ませる。読ませるだけではなく、感動を齎す、そして人間の不撓不屈の精神を（見直させる）。

（一八四八（嘉永一）年——。……まもなく還暦を迎える琉球の首里王府に仕える医家の仲地親雲上紀仁は身震いがおき、慌てて襟元を合わせた。……病苦に喘ぐ病人に誠意を尽くして治療してきた自負はある。だが、……流行病の疱瘡（天然痘には得心が持てないまま対症療法ばかりで済ませてきた）と。その彼が知り合いの医家の幼子を手助けすることができず、無念の思いをばねに、在住していたイギリスの医師ポーテーリンに教えを乞い、牛痘法を試みようとする。しかし東奔西走するも牛は見つからない。またノ口信仰なども根強く足枷になる。それでも幼い子を何人

行くはずだった。しかし新政府から拜命したのは囚獄の「首打役」だった。

剣術で鍛えられた歳の離れた兄との久方の稽古で彼の力の衰えを知り、やがて盗賊に殺されたその兄の後始末（家の面目を守るための隠蔽）をする。首の切られる瞬間を見たいという絵師との関わり、医者との関わり。刑死者の死体から取った肝は人肝丸と呼ばれ薬になったので山田家にかつて富をもたらしたという話（これは後半にも「ぼとり」という音と共に、肝が吊るされ干されているシーンが出て来る）。竹橋事件における首謀者たちの銃殺との違い。……そして最後に、嘘で塗り固めた言い逃れの揚げ句、重罪の死刑が宣告された高橋伝の首を打つことになる。（斬首は、正式に廃止と決まった。どうやら、高橋伝は、斬首された最後の刑死者となるようであった）と。

とにかく文は流れていて随所に読ませ所がある。地の文の描写がいい。会話も見事に噛み合ったやり取り……。時代の推移、その中で山田家の位置、そして絵師（芥川の「絵師良秀」を連想させました）や医師の要求、そして今の時代にはない残酷な仕事の役目……まで見事に描き尽くしていると感じる。当然の当選作と感じられた。

ただ、ふり返ってみて、微かな疑問が湧いては来る。伝が最後「会わせてー」と言った男を、「会わせてやろう……この世ではないがな」と騙すように受け流し、おぞまか連れ、やんばるの地に踏み込み感染した牛を見つけ、ついに種痘の発現に辿り着く。何度か評者は読み返した小説だが、そのシーンには毎回込み上げるものを禁じ得なかった。その地に近づいたシーンと、種痘の発現した箇所、の二つを引用しよう。

〈仲地は穏やかに広がる海を眺めた。海には表情があり、どこまでも広がる。水平線の彼方にはいつも新しいものが見つかる、と期待させるものがある。とはいえ……仲地はかつて嵐に遭い薩摩にまで流され辛うじて生き延びたことがあつた。しかし、山はことに低い山は無愛想で、ただぼうぼうとした緑の固まりであるが、海に比べると親しみやすい。……〉 沖繩のヤンバルの見事な描写だ。そして、

〈三日後の朝だった。いつものように仲地はヒコラとミノルの腕を手にした。震えた。祈った。……それらしい兆候さえ見当たらなかった。……翌朝は逸る気持ちを抑え明るくなるヒコラとミノルを呼び寄せた。……「そうだ、あの小さな紅いものが発痘したものなのだ。春になってようやく芽をだしたばかりのようなものだ。そうか、見えたか」仲地は胸の裡から湧き上がる歓びに震えた。その感動は部分的な抜出しでは伝わらないもどかしさがある。これも当選作で良かった気はする。

「線」〈僕は生きてることが苦しくて食事が喉を通らなくなった。……僕は少しずつ痩せ始めた。はじめ五十数キ

口あった体重は、五キログラム減り、十キログラム減り、……僕はついに一本の黒い線になってしまった。もう僕に体重はない。僕は軽々と、出歩くことができるようになった」と。そして友だちと出会うが、その時の自意識は面白い。きみは何を分けるのか、(自分と、自分でないものというのはどう? あ、でも待てよ。自分自身が線になってしまったのは、自分はただ分けるものであって、『自分』ってないわけか)と友に問われ、そう言われると確かに僕は「自分」がないような気がしたと。それから色々な相手や状況に出会う。セックス、先生の話、それから公園にいるようになり、そこで少女に出会ったり、はじめの現場に遭遇したりする(ここでの描写はなかなかのものと感じられる。そしてその少年の手記を読んだりもする)。ラストは線のまま、百年千年一万年経った……と終わる。発想も面白く最後までそのスタンスは貫かれ、会話その他描写も読ませる寓話になっている。ただ安部公房の『棒』という短編もあり、また後半は線というより公園の木になった感がある。そこから現実にごうコミットし得るか……評価の別れる点だとは思われる。

「震災下の脳手術」 3・11の東日本大震災と、夫の脳瘤の手術が重なってしまった女性の話——大震災から大分経った。しかし当時の傷は損壊した原子力発電所の問題として大きく尾を引きつつも、一見その後の政治やコロナの

て来て、実はケンには妻のクライアントであり、わざわざ葉を届けに行っていた相手だったと分かり、愕然とする……。話の作りは面白く、読ませる小説にはなっている。ヒマラヤでの高校生の息子を事故で亡くしたという同行者の話も面白くはあるが、その後の説明が冗長な感があり、タイトルもちよつと牽強付会な感があった。

「三蔵法師の鍋」 遣唐使の話と思って読み進めたが、人物が時を超えて「生きて」いる。滑らかな文体で、しかも説得力がある。話は遣唐使として唐に向かった道昭、幼い定慧、年かさの覚勝の主に三人のその後、特に道昭の視点で描かれている。彼は三蔵法師に逢い、教えを乞う。しかしその三蔵法師が、これほどにと感じられるほど、飄々として人間的に描かれている。(国禁を犯してひとり砂漠に出たという豪胆さはそこになく、きぶくれた細い体が動きにくそうに座っていた。長病みで声は弱く、まぶたは重く疲れていたが、その端正な面立ちには、ある種の清らかさがある。)そして道昭は法師に勧められた慧滿禪師にも教えを乞い、のちに法相宗の開祖となった窺基とも親交をもつ。「なに、長く座ったからどうというものでもない。尻にたこができるだけだ」そのように言う人間味のある師は、最後に道昭に鍋を渡す。「わたしが生死の境にあるとき、これをたずさえた人がむこうからやって来て、梨の羹あつものを作ってくださった。持ちはこびがよいから、もって

災害などにより、見えにくくなってきた感はある。しかしこうして臨場感あふれる状況の再現を読むと、いかに大変な事実が付きつけられていたのか思いを新たにする。(里子は身長百八十センチ、八十キロの敏夫の肩を組んで、一段、また一段、階段を降りた。火事場の何とかなったもので、自分のどこにそんな力があるのかと思った。……震災か、脳腫瘍か、どっちかにしてくれ。なぜ、一度にこんな苦難が押し寄せてきたのか)と。そして三月二十九日、震災後の手術室復旧の一番乗りで手術を受けられることになる。それは人生の中で一番長い一日と感じられた。それもむなく半年後夫は亡くなるが、今では幼かった息子も高校生になり、また当時手作りのメッセージカードで励ましてくれたナースを思い出したりし、主人公は気持ちを立て直らせて行く。事実の重みがよく伝わってくる作品だ。「梯子の上の子ベット」 主人公の妻が急死する。子どももない夫婦だった。その妻はフルタイムで働く薬剤師で忙しく、夫婦の会話はなくなっていた。葬儀も終わり一段落した時、妻のスマホが鳴り、ケンという男性から、槍ヶ岳で会おう……という内容のメールが入ってくる。そこで主人公は亡き妻が浮気していたのだと思い怒りを溢れさせる。登録されていた男の住所から、そこを訪ねてもみる。しかし分からない。それからヒマラヤへ行くことになり、そこで敬虔な念に打たれ、また同行した者の話も聞く。帰っ

お行き」……「おまえが凍えた人に粥でも作ってやれば、わたしが西方を旅したことも無駄ではなかったと、慧滿に言ってやれるだろう」と。そして、ラストの描写はまさに感動的だ。(道昭が袖ごと底を持って抱きよせると、鍋は袈裟にふれ、かすかな音を立てた。……春の陽光をうけた金物は人肌にあたたかく、ふしくれ立って割れた手指をいたわるように熱がたわってくる。身は削げ、かわききった道昭の体からこぼれ出る涙を受け止め、鍋は瑠璃色に輝いていた)と。時を跨いだ臨場感が見事に伝わって来た。

「クリスマスの御馳走」 夫が前立腺癌になる。そして骨に転移している。夫は幾つかの治療の後、亡くなってしまふ。ある意味、そのプロセスに破綻はなく、淡々と看取って行く感じではある。それを恨むどころか、夫の我慢によって妻の主人公は支えられたという感謝の念が尊い。看病の中で、(夫のおならの音と私の笑い声が交互になり、それまでのこだわりが吹き飛んだ……新婚の頃、夫は煙草の煙で小さなドーナツを作ってくれたものだった……まるでポロン船みたいだった。……夫の咄嗟のユーモアはいつでも私を笑わせてくれる。……夫の下の世話ができることが幸せだった)とある。寄り添い生きる命の意味が鮮明に描かれている。

「昭和の恋」(1960年代の私立小学校には、日本人と西洋人のあいだに生まれた学童が、学年を超えて何人かい

た。性別を問わず、彼らは拔群に容姿端麗で目立った。この二行が、ほとんどこの小説を象徴していると言える。主人公は、米国と日本のハーフである女子（すでにモデルの仕事もしていた）にぐいぐいと惹かれて行く……「ウォーカー・ブラザーズ（のスコット・ウォーカー）」を知っているという一点で繋がりをもち、一心に片思いを募らせていく……回想小説として纏まっているし、歳の近い評者は共感を禁じ得ない。作者は実に上手い〈情〉の作り手「ジョー・メイカー」と呼んでみたい（笑）。

「毛虫のレラ」〈礼来は人より毛深い。小学五年の女の子にとつて毛深さは深刻な悩みだ〉と。彼女はそれ故、ある種のいじめに遭う。その友人の女子が変わっていて毛虫が好きで、そんなことは気にせず、それが救いともなる。ある日主人公は母親に確かめると、父親がアイヌにルーツを持っていたこと分かり、生まれて来なければよかったと叫んでしまう。それでも担任の女性教師の計らい、また毛虫がアゲハに成長する姿などを介して、立ち直って行く……暖かく希望もあり読ませる小説だった。少し、「醜いアヒルの子」を連想もしたが。

「元氣？」 高校時代知り合い友人になった者同士の、大人になっても続くライン交換日記。ライン部分を太字で書き、それに対する主人公の内面も続けて記している。ちよつとした新しい試みに感じられた。しかし、一方は認知症にシヨンの本質を射抜いた言葉かと感じられた。

「捨てる神あれば拾う神あり」 明治の終わりの新聞記者から見た時代と、板前の人生を送ったその父親の話。妻を亡くしてから塞ぎ込んでいた父親は、とある小料理屋の若い女将に拾われて、板前人生を復活させる。時代の大きな状況と、実生活をしている庶民の生活が交差し、一気に読ませた。作品末に資料として当時の平均寿命の表が載っていたが、何と男女とも約四十四歳だった。

「魚影」 この常連の作者は毎回発想を変え工夫を凝らし投げ掛けては来る。今回は、かつて旅行会社に勤めていた主人公。リーマン・ブラザーズの経営破綻があり、日本経済が大打撃を被ったその頃の話、かつての部下からゴルフコンペに誘われる。そして様々な回想が語られていく。ゴルフコンペに参加した仲間と新たに会社を興した者もいたがやがて倒産する。タイトルは溪流で見かけた紅鮭に喩えて、川でどのような泳ぎをすれば渡っていったのか……という主人公の思いから来ているようだ。

「裸足のリナ」 バングラデシユの貧しい女性たちの話。

なり、もう一方は最後、夫と別れてしまう。その不遇な末路がラインでどこまで表せたのかは、いま一つ伝わっては来なかった。むしろ、「たすけて」の一言で、飛行機に乗って駆け付ける、そんな行為をさせたのが何なのか——を中心に描かれた方が読ませた気がする。言葉への考察も描いて欲しかった。

「揺らぐ窓」 足掛け四十年の教員生活を経た主人公。定年退職しても県協同組合の専務理事になり、身体的にもそれなりに若々しさを保っている。話は出勤途上のバスの車中での様々な回想。眠気に誘われうづらうづらするが、はつと目覚めると大学生で亡くなった娘を思い出す。そしてバス通勤の中で〈若い一人の娘と、静緒（亡くなった娘）とを重ね合わせて夢想するように〉なる。そればかりか、ミュージアムを見たせいで、ハル、そしてナツと彼女に命名し、少しストーリーカーっぽくもなる。でもさすがに目が覚めて現実に戻る。夢想が奔走しそうになる所など、けっこう読ませるものとなっている。

「振り返らない旅人」 工業高校から通信社に入社し、そこからマレーシアに派遣された主人公の話、一九六〇年代のこと。警察の通信保守課で関わった三十歳ぐらいのエディラという中心的人物と仲良くなる。それらが瑞々しい筆致で描かれ、主人公の青春の輝きとなって伝わってくる。色々面白いエピソードはあるが、中でもフライドライ

婚婦の烙印を押されて、なお出産する現地の女性……。当地のことはよく描かれているとは思う。〈結局は……また新しい死が産み落とされるだけよ。それは苦しみでしかないわ……〉とリナは弱々しい声でいったと重くインパクトのある言葉ではあるが、「わたし」がどういふ関係をもつ立場なのか、ガラス越しに眺めているような感じがした。

「月光」 音楽に身を捧げるピアノ弾きの男との出会い。音楽バーの描写は中々読ませ、彼に心酔した若き主人公。ピアノ弾きはアル中で、やがて死んでしまう。それでも愛する女性はいて、彼女は身籠っている。主人公の思いの強さは分からなくはないが、ピアノ弾きの何に惚れたのか……その理由がいま一つ伝わってこなかった。

「ひずんだ道」 自己免疫疾患で、診療所に通う女性の話。主人公は毎日食べ物のことばかり考えている。見知らぬ場所ので孤立感に苛まれる心境が良く描かれている。食物に溢れた飽食の時代、そして食事は何をつくれればいいのか——という強迫感に囚われる時代、そのアンチテーゼは感じられるが、主人公の内的感覚だけにどまってしまう。かつて「人はパンのみに生きるにあらず」と言われたことがある、その逆の視点からの、拡がりのある小説を構築してもらいたい気がした。

「看取り引受人」 転職して十年の五十歳男性が主人公。私大を出て地元の化粧品メーカーに就職したが、満足の

く成果を出せず印刷会社に転職、しかし穴が空いたような心境。週に一度気分転換に近くの天然温泉に行く。そこで老人とその娘に出会い、看取りを要請される……やがて人物を認められ、その保養施設の施設長になって欲しいと言われ、偶然の運も含めた一つの人生は描かれている。

「寡黙亭の面目」 銀華文学賞草創期からの書き手。設定された場で人情の機微を、明るく描く名手。今回はJR水道橋駅前の白山通り裏「居酒屋 かすみ亭」が舞台。極端に無口な主人と、フリーライターの山田が中心。色々話はあるが、ちょっとミステリアスなのは、朝の出勤時間帯に若い女性たちの謎の出入りはなぜか？ それは埼玉や千葉から神田に来る派遣社員の女性たちで、出社前に「かすみ亭」で身支度をさせてもらうためだったのだ。苦節を営めてきた主人の弱者への「優しさ」が光る。

「踊るピエロの小劇場」 俺も四十を超えておっさんと呼ばれる年齢に差し掛かった。思えば、ずい分と遠回りの人生を歩んできたものだ。そう引き籠りの人生だったと主人公は独白する。ピエロに導かれて、自分の過去のような話をその小劇場で見る、そしてまた街へ歩みだそうとする。設定は新しいとは言えないが、過去の回想などは良く描かれてはいる。

「青き日」 ユーラシアのど真ん中で、遺跡発掘調査に挑む男性の話。ただ彼はロマンを抱えつつ、四十代に差し掛かるところは、少し拡散してしまった感がある。

「靴を愛する男」 小さい頃から「くつお」とあだ名で呼ばれた靴フェチ男の話。法学部の助教授にはなったが、秘密の部屋を持ち、孤独な夢想に耽る。最愛の靴を関わった女に盗まれそうになるが、靴そのものが抵抗し主人公を離れない……面白く作られてはいるが、さらなる展開を読みたい気がした。

「花の名前」 妻を亡くし、退職もし、自らも胃がんになってしまった男性。青年の頃別れてしまった父親にも再会し、自らの人生を振り返りつつ、どこか達観した気持ちになって行く……人間の晩期がそれなりに良く書かれてはいる。

「下曾我物語―小説・尾崎一雄と太宰治」 「暢気眼鏡」で芥川賞を貰った小説家尾崎一雄、その長女の視点から描かれている。良く調べて書かれてはいる。

「揺れる木」 自然林実験エリアで、木々が意志をもち人間化していく話、発想は面白いが、もう少し具体的に突っ込んで、SF的な感覚で書かれても良かった気がする。

「幕末二人のアウトロー」 幕末のエピソード、浪士隊を生み出した清河八郎と新徴組の隊士となった山本（祐天）仙之助との出逢いから、双方の最期まで。新選組の生れる前の話としての面白さは感じられた。

かつてはまだ正規の職を得ていない生活の不安定もある。現地の人たちとの関わりは瑞々しい。そして右腕のない遺体を遺跡から発掘するラスト、それを自らの日本漁村での成育時の記憶と結び付けるのもいい。ただ青き日というタイトルに何を込めたかったか、それを突き通してみせて欲しかった。憧れと挫折と失墜と、なお求める何か……を。

「遠い極楽浄土」 生きていける極楽浄土。熊野市波田須はそんな里である。主人公のその地への愛着は並々ならぬものが伝わってくる。主人公は妻を亡くし、さらに頼みにした長女の婿も亡くしている。それを元にかつて脊椎カリエスを病んだ主人公の内面そして定時制の女子同級生との関わりを読みたかった。しかし、恩師の国語の先生とその人生、さらには中上健次の小説「火まつり」も持ち出され、これでもかと書かれると、却って纏まりが付きにくくなった感があった。

「空へ、空から」 農村に育った主人公の少年時代の話。人手を必要とするその世界では、幼いなりに仕事に使われる。その世界の描写（父親との関係など）は瑞々しく読ませるものになっている。水を汲まずにホースで吸い上げようとするサイフォンの原理の知恵などもおもしろい。原爆（長崎）にやられ頭が剥けてしまった少年との関わりも読ませ、その少年の気持ちにも踏み込んでほしい（犬のことなど）。ただラストで火事になりその友が消えてしまっ



選考会風景 2024.11.3 東京・国立「サロン・ド・八覚」にて